

ネットワーク中野山

Vol. 32

「新潟地震の思い出に寄せて！」

防火防災副部長：山田英典

大地震や大洪水等の災害の後、人は『想像もしなかった。』『こんなことは初めてだ。』と一様に思い、また言います。しかし、よく考えてみれば当たり前のことで、想定外の事態とは、人の生涯の時間越え、経験を超えているから想定内ではないのです。

日本各地の最近の大災害の報道を見聞きしても、どうしてもそれが他人（ひと）事のように思えてしまうのは、やはり経験しないことは、実感として生かすことは不可能なのではないでしょうか。

そういう意味合いでは、特に新潟市民は私を含め、中越地震や三条の洪水を身近に見聞きしても、自分自身の問題としてはまだどこか他人事感があると思います。

しかしながら敢えて、私が経験した災害では一番大きかった新潟地震の当時の実感と現在それが起きたらどうなのかという想定を全くの素人目線で話してみたいと思います。

私は現在 66 歳ですが、地震発生は 50 数年前の私が中学 2 年生の時でした。石山中学校は越後石山駅のそばにありました。校舎はオンボロの木造 2 階建てでした。昼食後 2 階図書館にいた時発生しました。気分が悪くなるほどの揺れの中、階段から逃げる途中、左手側の内庭のコンクリートの足洗場の水がバッチャンボッチャンとすべてあふれ出ていました。右手側のグラウンドの白い地面では真っ黒い水が数か所噴水のように吹き上がっているのを見えました。

発行：中野山小学校区コミュニティ協議会

責任者：小松 茂 (025-276-0161)

発行日：平成 28 年 10 月 28 日

しかし、校舎を含め周辺の建物には、目に見える深刻な被害は無かったように記憶しています。外へ出ると、巨大な煙が今の卸団地あたりに上がっているように見えました。昭和石油のタンクの大爆発によるものが近くに見えたのです。

夕方近くになると大きな被害の出た市内の中心部から子どもや女性を中心に信越線の線路伝いに大勢避難してきました。駅周辺の農家を中心に受け入れ、かなり離れた我が家でも十数人におにぎり等の炊出しをしたのを思い出します。

でも、幸い石山地区で昔からの集落を形成していた砂丘列には、目立った被害はなかったように思います。しかし、当時と現在では、まるで別世界のようにこの地域は変貌しました。新潟市は砂地の沖積層によって形成されており砂丘地と液状化で有名になった地帯がはっきりしました。私たちの鳥屋野周辺は常に水害に悩まされ亀田郷と呼ばれ、見渡す限り田んぼでした。現在その田んぼはほぼ埋め尽くされその上に無数の住宅地や商業地が乗っかっています。その後、水害対策として様々な給排水システムが整備され、想定の上では、安全とされています。しかし、広大な水田が失われたことによる湛水・保水能力も失われました。しかも脆弱な地盤がその下に存在していることも事実です。言い換えるとこの地域は、軟らかい地盤の上に浮かぶ街といってもよいと思います。このような地域を見つめ今一度私たちは、新潟地震以上の地震、歴史上の大洪水以上の洪水つまり想定外の事態が発生したらどうなるんだろうという想像力とそれに対する最低限の準備・用意が必要なのかなと私は最近思っています。



平成28年9月25日に実施の「**中野山小コミ協合同防災訓練**」で

『**中越地震の被災体験!**』を小千谷市「吉原 昌隆 防災士」に語ってもらいました。

⇒自助と共助について学習しました。

《吉原講師の講演要旨》

1. 発災時の様子

●キャンパス川口内のサン・ローラ川口（日帰温泉施設）の玄関ロビーで揺れる。

- ・下駄箱は倒れ、内履のまま、車に飛び乗り自宅に向かう。
- ・家族の安否が気にかかり、家に急いだ。（携帯電話は不通）

●道路の破損

- ・通れる道を選びながら車の腹を傷付けて走った。
- ・道路の損壊が広がり、数時間後にはサン・ローラ川口から車を使って、町に出る事が出来なくなった。

●自宅、近所の様子

- ・自宅に到着後、近所の人々と安否を確認し合う。自分の家族とは連絡が取れなかった。
- ・周り7軒が倒壊
 - ◇隣家から「衣料品店の1階に店員が残っている。返事はあるが、外に出られない。」
 - ◇道路角の食料品店は、店先の屋根が曲がって落ちている。
 - ◇吉原は家族を捜しながら、何とか家に入る。

⇒ダイニングキッチンの冷蔵庫が、部屋の反対側で転んでいる。幸い、家族は隣町（小千谷市）に出かけており、夜半、役場前の混乱の中で再会することができた。
（私は徒歩で帰宅）

※安否確認の方法に混乱

●隣近所による救助活動

- ・余震の続く中、自宅前の路上にて、地域住民で安否を確認し合っていた時のこと。「隣家の方が家の下敷きになり、閉じ込められている。」と助けを求める声が聞こえた。
 - ⇒集まった近所の者3名で、その倒壊した家屋（2階建て木造）に駆けつける。
- ・「倒壊した家の1階に高齢者が2名残っている」と聞く。
 - ⇒余震に揺れる潰れた家屋、潰れてもある程度の高さがあった。男性3名で、柱などに手を掛けるが、動くものではなかった。
- ・役場（川口町役場）前に避難した地域の方々に応援を頼む中で、小千谷消防署川口出張所の隊員が救助に駆けつけてくれる。
- ・余震のたびに、隣家の屋根瓦が落ち、足元に飛んでくる。立ってられないような揺れ。倒壊家屋も揺れる。
- ・1階まで掘下げての消防隊員の懸命な救出活動と、隣近所の住民の支援があり、閉じ込められいた高齢者夫婦は、ひとり一人無事に救出された。



「1階がつぶれた衣料品店は毛布を配る」

●近隣住民の知恵と協力＝共助と公助

- ・倒壊した家の隣に住む渡辺さん 「この時間、二人は、右手奥の和室にいる。」
これを受けて消防署員。⇒右手奥の和室の真上の屋根にあがり、真下に向け屋根を破り始める。
余震の度に、倒壊家屋全体が大きく揺れる。
- ・翌日、高齢者夫婦2名は、地域の方々と一緒に、役場前の広場に避難していた。

2. 当日の夕方からの行動

- ・吉原は、川口町役場前に設置された対策本部（当初はパイプ椅子数個）において、消防署員の活動を手伝う。
- 災害対策本部
 - ・対策本部らしきものが形成されていった。
⇒役場前の広場に、役場職員数人で集まった。ここが災害対応の中心となっていった。
余震の中、役場庁舎に入る者はいなかった。
- 役場前の広場
 - ・余震が続く中、家族が連れ立って、駐車場に集まる。
⇒駐車場のアスファルトの上にしゃがみ込んでいる。
・暗くなる中、人を探し求める声が、あちこちに響く。
- 地域の助け合い
 - ・食料品店の若主人と従業員が、倒壊した店舗に入り、かき集めた缶ジュースなどを子供や高齢者に配る。
 - ・1階が潰れた衣料品店は、陳列棚から毛布を取り出し、気温が下がる駐車場の避難者に配る。
- 役場前駐車場で
 - ・魚野側の対岸の集落（西川口）と連絡が取れない、誰かを鉄橋を渡らせて確認に行かせよう。
⇒誰が行けるだろうか。
 - ・次に余震が来ると、あの家が倒れる。その家の前には人を通らせないようにしないといけない。
⇒バリケードを設置しよう。



「震災の翌朝 川口町役場前の駐車場」

3. 深夜から翌朝に

- 暖をとる、食べる
 - ・暖房のためにも「火を焚く」必要があるとのことで、裏山から生木、雑木等を手分して集める。⇒「倒壊家屋の一部を持ってきた」などの会話も聞かれた。
 - ・役場職員の保母たちが、板材と釜で炊出しを行う。熱いおにぎりを握った保母が自ら食べることはなかった。⇒（寿司屋がネタを提供した。）
 - ・余震を受けて、自宅の確認に戻る若い親に代わって、小学高学年、中学生が、幼児面倒を見る
⇒いつしか、ひと隅がそうしたエリアになっていた。
⇒（青空保育園のように）

4. 自治会活動

- ・3日目に自衛隊が入り、炊出しなどの支援活動が開始された。自治会では、各避難所（場所）の対象者を把握し、これを集約するなど、町会エリア内の確認を行った。
- ・日々変化する避難場所と配食数の把握には、組織としての統一した対応が求められた。

5. 後日考えたこと

・避難している近所のおばあちゃんにカメラを向ける意識はなかったが、「その時の記録は大切な意味を持つ」と、時間が過ぎる中で感じている。

・後に、「町の者は、町外に向かって、もっと早い時期から支援要請を行うべきであった。」との声を聴いた。

～役場前の会話の主題、心配する気持ちは、分散する各地区の安否確認にあった。

～サン・ローラ川口に足止めされ、帰れない来場者の対応や、地域を通過する国道で足止めされた方々の対応に追われていた。

～こんな災害は、町外も同じ状況と感じていた。今求められる対応を自分たちの手で如何に処理するか、追われていた。



「全壊した食品店」

中野山地区として 防災上の今後の課題



2016/09/25 09:59

項目	状況					課題
	大人男性	大人女性	子ども	役員と防火 防災部員	計	
今年度の参加状況	152	119	15	33	319	<ul style="list-style-type: none"> ・参加0人の自治会をなくしたい。 ・若年層の参加数を増やしたい。
今年度の反省	<ul style="list-style-type: none"> ・講演の内容は、概ね好評であった。 ・1時間、床に座るのは、苦痛な人が居た。 ・避難所まで遠い所もあり移動に時間がかかった。 ・避難者カードの導入で少し混乱があった。 					<ul style="list-style-type: none"> ・講演会時に休憩時間を入れたり、トイレの場所を分かりやすくする。 ・要介護者への対応が必要。 ・各家庭に避難者カードの説明が必要。
平成29年度に向けた取り組み	<ul style="list-style-type: none"> ・全家庭を対象に要援護者に対する対応や安全タオルの周知を行う。 ・簡易避難者カードを中野山小学校区の各家庭に配布して避難者利用を円滑に行い、情報収集につなげる。 					<ul style="list-style-type: none"> ・安全タオルを全家庭で実施するのは難しい。 ・避難者カードは各自治会で丁寧な説明が必要である。

今後の防災訓練は他のコミュニティを参考にしたり、各自治会が工夫している事例を持ち寄り町内班長などの意見を広く求める事でスムーズに実行したい。要介護者の問題は関わり合いを持つ組織と連携して情報収集を行い解決したい。今までの研修会、講演会等から得た知識で災害マニュアルを作成していきたい。そして今後も防火防災部会を開催し、今回の反省をもとに課題を精査し備えを改善していきたいと考えています。
(文責：防火防災部役員)